

レビ記を学ぶ (3)

塩野和夫

第Ⅳ部 贖罪日 レビ記16章

第五章 贖われて生きる

1 聖書における贖罪

(1) 贖罪日 (レビ記16章)

レビ記16章について「これはレビ記の附録である」とする学者がいる。確かに16章の前後を見ると、レビ記でも中心的な規定とされる「清潔についての規定」(11-15章)と「神聖法集」(17-26章)がある。その間にそれらからは独立した比較的短く附録とも呼ばれるレビ記16章が入っている。

この事実についてどのように考えるべきであろうか。ここではむしろ積極的に「レビ記の編集者はこの場所に16章を入れると全体が生きてくる。そのように重要な価値を認めたので、あえてここに置いた」と考えたい。そうだとすれば、レビ記16章に記されている重要な価値とは何かが問われる。共に学びたい。

レビ記16章は「贖罪日の規定である」とされている。1年の罪と咎の一切を赦し清められるために設けたのが「贖罪日」である。イスラエルがレビ記16章の規定に従って実施したのは捕囚後とされている。バビロン捕囚から解放されたイスラエルは罪の現実を深く知らされ、重要な祭儀として贖罪日を守るようになった。したがって、レビ記16章が最終的にまとめられ、現在の位置に置かれたのは捕囚後である。

ただし、「非常に古い素材もある」とされている。たとえば「アザゼル」という人物である。かつてアザゼルは「荒野に住む悪魔」と考えられていた。荒野は恐ろしい世界だった。だから、イスラエルは古くから「恐ろしい荒野にはアザゼルが住んでいる」と考えていた。つまり、レビ記16章を編集した時点で全く新たなものが作られたのではない。むしろアザゼルという呪術的な人物まで含めながら、捕囚後に「贖罪日」の規定としてまとめたのである。

(2) 生活の焦点としての贖罪

およそ聖書にはふさわしくない人物アザゼルが贖罪日の規定の中に入っている。「アザゼルなど1年に一度の大切な贖いの儀式の規定にいない方がよい」と考えて当然であろう。しかし、聖書はレビ記16章からアザゼルを除外しない。なぜ、除かないのか。

アザゼルは人々の生活における不安や怖れを語っている典型的な事例であった。あるいは雄牛・羊・山羊が犠牲として出てくる。これらの動物も人々の生活そのものであった。つまり、アザゼルにしても犠牲の動物にしても贖罪と人々の日常生活との関わりを端的に示している。

なるほど贖罪日には日常生活から離れて神の前に出る。けれども、それは日常生活から切り離して、「魂だけが清められるため」というのではない。むしろ、贖いの儀式は1年の生活すべてと関わる。すべてと関わりながら、それらが一点に絞られる焦点として贖罪を受けた。

人々は日常生活における喜びと楽しみ、不安と怖れ、それら一切を抱えたままで神の前に出た。そのようにあるがままの人間が神によって贖われる。これがレビ記16章の記す贖罪であった。

(3) 聖書における贖罪

ここで聖書における贖罪について概観しておきたい。

i) 神による解放

贖罪の第1の意味は神による解放である。様々な悪しき力に人間が囚われている。たとえば、エジプトにおける隷属がそうであった。悪しき力の下での不自由もそうである。神がそのような力から私たちを解放してくださる。これを贖いという。

ii) 神への所属

悪しき力から解放されると私たちは神に属する者とされる。これも贖いである。人間でも動物でも「初子は贖われて神のものとされなければならない」という規定があった（出エジプト記13章1-2節）。イエスも長男であったから神殿で神に属する者とされる儀式を受けられた（ルカ福音書2章22-24節）。

iii) 犠牲による贖い

贖いにおける重要な内容として「犠牲による罪の赦し」がある。ここでは贖わなければならない中心的な悪として罪という理解があった。この立場によると神に対して犯した罪は命あるものの犠牲によらなければ赦されることはない。イエス・キリストの十字架の死も命あるものの犠牲という考えの上に成り立っている。

iv) 終末における望み

贖いには終末における望みがある。これも贖いの重要な要素である。贖われた者の望みは贖いの力にある。贖いが力強く働くので、そこに贖われた者の喜び、望みがある。イエス・キリストの贖いは今を喜ぶだけではない。時と所を超えて終末のその日まで喜ぶことのできる贖いの現実がある。

2 贖罪日 レビ記16章

レビ記16章の学びに入る。

(1) 贖罪への備え 16章1 - 5節

聖所にふさわしくない行為をしたために、アロンの二人の子は主に打たれて死んだ(レビ記10章)。その時、アロンは黙さざるをえなかった。主の前に出ることはそれほど重大で、悔るわけにはいかなかった。

「事件の直後」(1節)、つまり事件の記憶も生々しい時に主はモーセを通して「至聖所に入る時」の規定をアロンに語られた。それは「決められた時以外に……死を招かないように」入らなければならない、入る時に必要な準備やイスラエルの人々の贖罪の献げ物を内容とした。

アロンは厳粛に聞いたに違いない。

(2) 主のもの、アザゼルのもの 16章6 - 10節

雄山羊2匹が儀式のために引いて来られる。1匹が「アロンはくじで主のものに決まった雄山羊を贖罪の献げ物」として用いられた。それに対してもう1匹は「くじでアザゼルのものに決まった雄山羊は……荒れ野のアザゼルのもとへ追いやる」。

ここにある「アザゼルのもとへ」という表現が古い考えに基づいている。アザゼル

は「荒野に住む悪魔」と考えられていた。しかも、アザゼルの怒りを鎮めるために1匹の雄山羊が用いられる。要するに、ここでは主と並んでアザゼルが置かれている。言うまでもなく、アザゼルに対する考えにしても、彼の怒りを鎮めるために犠牲を捧げる規定にしても、聖書の立場からすると非常に問題がある。それにもかかわらずなぜ、レビ記16章は主と並べてアザゼルを置いているのか。

このような内容の背景には古い時代の人々の荒野に対する感性が影響していると考えられる。彼らはしばしば荒野で生活し、様々な事故に出会い、荒野に対して不安を感じていた。そのような荒野に対する恐怖が主と並べて、アザゼルを置く結果となった。

レビ記16章はイスラエルの古い記憶を保存している。

(3) アロンと一族のため 16章11-14節

次にアロンと一族のため贖いの式が行われる。

アロン一族とは「祭司」のことだと思われる。祭儀を司る祭司である。捕囚後に祭司はアロンの家系から立てられる習慣となっていたからである。贖いはまず儀式を執行する祭司自らが預からなければならない。その後に祭司は民のために贖いの儀式を執行できた。

なお、この箇所には16章6節との重複が認められる。

(4) 民のための贖い 16章15-19節

その後に民のための贖いの儀式が行われる。

イスラエルの人々の汚れと咎、もろもろの罪のための贖いである。贖いの儀式は雄山羊の血を振りまいて行われた。罪は生きた人格的な力だと考えられていた。この力は罪にとらわれた者の手では解決のしようがなかった。そこで祈りを込めて命の血が振りまかれた。

命あるものの血の注ぎによってのみ罪の力からの自由が得られると考えられていたからである。

(5) すべての罪責を担う雄山羊 16章20-22節

儀式が続く。

くじでアザゼルのために選ばれた雄山羊がアロンの前に引いて来られる。アロンは雄山羊の頭に両手を置いて、イスラエルの人々のすべての罪責と背き、罪を告白して、雄山羊を荒野へ追いやった。すなわち、イスラエルのすべての罪責を担う犠牲として雄山羊はアザゼルのもとへ送り出されたのである。

雄山羊の姿にはイエス・キリストの十字架の死への予型がある。

(6) 儀式の完成 16章23-28節

雄山羊を荒野へ追いやると最後の儀式に入る。

ここで行われる焼き尽くす献げ物（燔祭）とは犠牲の動物を焼いて良い香りを天高く上らせ、神に喜ばれる儀式のことである。贖罪の儀式を終えると、祭司のためイスラエルの民のため全焼の献げ物が贖罪の儀式として行われた。

これをもって贖罪の儀式の一切が完成する。

(7) 年に一度の儀式 16章29-34節

結びで贖罪日の規定と意味について語られる。

この儀式は年に一度、7月10日に行われた。イスラエルに住むすべての者が贖罪の儀式に参加しなければならない。

こうして、イスラエルに住むすべての者が年に一度贖罪に預かることが出来た。



贖われて生きる

3 礼拝者の生活

(1) アザゼルとは誰か

アザゼルについて学ばなければならない。

イスラエルの人々にとってアザゼルは荒れ野で過ごした日々における恐れと不安のシンボルであった。そのような恐れがアザゼルという人物の人格として記憶されていた。無意識の層に広がる不安、それはいつの時代にも人間に付きまとう現実であろう。そうだとすれば、私たちにとってアザゼルとは誰なのか。恐れや不安は私たちにとって何なのか。

レビ記16章は日常生活における恐れや不安を携えて神の前に出ることを良しとしている。したがって、礼拝とは清められた者が日常生活から離れて清いままに参加する場ではない。むしろ、日常生活における不安や恐れを持ったままでも向かうことが許されている場であった。

ここにキリスト者の慰めがある。

(2) 贖い — 神の求め —

アザゼルの存在は人間には恐れや不安から救われたいという願いがある事実を端的に語っている。

人間の求めに応じているのが神による贖いである。しかしながら、贖いとは本来的に人間の求めでもなければ業でもない。そうではなくそのような贖いへの願いを神が私たちに求められている。贖われて生きるためである。したがって、私たちはただ贖いの神を頼り赦しの力を信じて生きればよいのである。

その時、神の贖いの力に生かされている。

(3) 贖いに生かされる

贖いの儀式は年に一度贖罪日に行われた。たった年に1回ともいえる。しかし、贖罪日はイスラエルに対して根本的な意味を持っていた。

人格に対する影響は数の多い少ないではなく、時間の短い長いによるものでもない。たとえ回数は少なくとも時間は短くても、人間の人格に深く触れ清め生かすだけの力あるものが私たちに強い影響を与えるのである。

贖罪は神が与えて下さる大切な恵みである。旧約の時代には贖罪の儀式を中心にし

て週ごとに安息日の礼拝があった。キリスト教会でも週ごとの礼拝を日曜日に行っている。時間は短くても、礼拝には私たちが養うだけの力がある。

贖いの命に生かされる者でありたい。

(4) 礼拝者の生活

贖罪の意味を正しく理解するところから礼拝者の生活は整えられていく。

礼拝における贖いは1週間の生活の焦点である。礼拝者は様々な仕事や奉仕に携わっている。しかし、それら一切の焦点は神による贖い、罪の赦しにある。これがキリスト者の生活の根本である。どんな日常生活をしていてもこの根本を離れたところに礼拝者の生活はありえない。

だから、イエス・キリストによる罪の赦しが生活の焦点としてあることを信じ、週ごとの生活を送る者でありたい。

4 覚えましょう

- (9) 祭司たちと民の全会衆のために贖いの儀式を行う。これはあなたたちの不変の定めである。 レビ記16章

1年に一度の贖罪の日が定められた。その日にイスラエルは集中して神による贖いに預かった。それは1年に一度だった。しかし、年に一度の贖いには生活を清め支えるだけの力があつた。生活のすべてに影響を与える贖罪の力を忘れてはならない。

- (10) 雄山羊は彼らのすべての罪責を背負って無人の地に行く。雄山羊は荒れ野に追いやられる。 レビ記16章

アロンは雄山羊の頭に両手を置いてもろもろの罪責を告白した。こうしてイスラエルの罪責は雄山羊に担われた。罪のない雄山羊が罪責を負ってアザゼルのもとへと追われていく。雄山羊の命によって贖われると信じられていたゆえである。罪責を担う雄山羊の姿にイエス・キリストが重なる。

第V部 神聖法集 レビ記17-26章

第六章 血は命 レビ記17章

1 神聖法集

(1) 名称の由来

レビ記17-26章には独立したまとまりを持つテキストがあり、これを神聖法集と呼んできた。しかし、なぜ神聖法集なのか。2つのことを確認しておきたい。

まず、19章2節後半にこのようにある。「あなたたちは聖なる者となりなさい。あなたたちの神、主なるわたしは聖なる者である」。ここに語られているのは神とその民との関係、つまり「主なるわたしは聖なる者である」から「あなたたちは聖なる者となりなさい」という関係である。これが17-26章で繰り返し語られている。そこで、神聖法集と呼ばれる。これが一般に説明されている名称の由来である。

しかし、もう一点テキストから教えられる事柄がある。それは神聖法集という名称と17-26章の内容との関わりである。この箇所には種々雑多な内容があって、まとまりがあるとは言えない。けれども、そこには一貫した主張がある。「聖なる者となりなさい」という主張である。

つまり、神聖法集という名称のもう一つの由来は聖への要求である。それは単に繰り返されているだけでなく、17-26章の雑多な内容を貫く要求でもある。

(2) 聖書における聖

神聖法集を学ぶにあたって重要な言葉は聖である。教会では日常的に使っているが、聖書における聖とは何なのか。学んでおきたい。

a. 輝きとしての聖

聖の語源として考えられる2つの言葉がある。これら2つはいずれも聖書における聖の概念と強い関わりがある。

一つは「明るい」とか「輝く」という意味を持つ言葉である。これを語源とすることから、聖とは燃やし清める炎、輝く火とされる。事実、聖書の神はしばしば火と関係して語られる。聖なる神は時に火のように輝き、罪を焼き尽くしてわたしたちを清

めてくださる。

これが聖なる神の一面である。

b. 分離としての聖

語源とされるもう一つは「分離する」, 「分かつ」という意味の言葉である。

この言葉によると、聖なる神は俗なる人間とは分かたれている。神は聖なる方であり、俗なる人間は罪の世界にいる。だから俗なる世界から神を求める時、聖なる神として自覚される。しかし、聖書の神は自らの聖をもって良しとされているわけではない。聖なる神でありながら、わたしたちを罪との絡まりから救い出そうとされるからである。

ここに聖である神とわたしたちが会いえる根拠がある。

c. 救済としての聖

神の聖は人間の救いと関わる。この関わりは二つの側面を持っている。

罪の世界から救済する方が罪の支配下にあるとしたら、それは明らかな矛盾である。罪の支配下にある者に罪の力からの解放力はないからである。したがって、神の聖は罪から全く分かたれていなければならない。しかしもし、聖なる方が罪の世界と何の関わりも持っていないとしたら、罪の世界から救い出す手がかりを持たない。

そこで、聖なる方は罪の支配に対して全く分かたれている一面、そのような存在として俗なる世界で会いえる者でなければならない。そのような方としてわたしたちはイエス・キリストを知り、その救いに預かっている。

d. キリスト者の聖

キリストによる救いの業が行われる時、そこに新しい聖なる場所ができる。それは聖なる神が支配し働かれる場所である。他方、人間は土の器であり自らに聖を持つことはできない。しかし、土の器にキリストの救いが盛られ神の働きに用いられる時、神の聖に用いられる聖徒とされる。これがキリスト者である。

キリスト者はこの世にありながらキリストのゆえにこの世から分かたれている。この真実はキリストから来るのであって、わたしたちの力や可能性によるのではない。わたしたちの救いはキリストの恵みから来た。この救いを生きることにキリス

トの聖に預かっている。

レビ記における「聖なる者となりなさい」という求めは、キリストの恵みへと至る聖書の一貫した主張である。

(3) 神聖法集の目的

神聖法集に戻る。神聖法集では繰り返し「あなたがたは聖なる者となりなさい」と勧められていて、多彩な内容も聖という概念で一貫していた。このような特色と内容を持った神聖法集がまとめられた目的は何なのか。

それは多様な生活において神にある者としてふさわしく生活することである。神聖法集の語り口は説教調である。説明文ではなく勧めでもなく、説教調である。「聖なる者となりなさい」と神の権威を持って説教をしている。

わたしたちが神の恵みにふさわしく生きることを具体的に説き、勧めるところに神聖法集の目的はある。

(4) 神聖法集の構成

神聖法集の構成を見ておこう。

a 血に関する規定 17章

まず血に関する規定から始まる。血は神に属し、神聖だと考えられていたからである。

b 性に関する戒め 18章

性に関する戒めが続く。聖の重要な要素として人間の性が考えられていたためである。

c 神と隣人に関する戒め 19章

神と隣人に関する戒めが続く。聖は人間関係の中に生かされなければならないからである。

d 死に値する罪 20章

死に値する性的な罪が言及されている。

e 祭司の聖性 21章

神と民との仲立ちをする祭司には特に聖が求められた。ここでは祭司が保持しなければならない聖性が語られている。

f 献げ物の規定 22章

献げ物が聖であるようにと規定されている。

g 祝祭の規定 23章

祝祭が聖に預かるにふさわしいものであるようにと定められている。神の聖に預かる主要な場は礼拝だからである。

h 燭台と備えのパン 24章1-9節

神の幕屋を照らす燭台と備えのパンに関する規定である。

i 冒瀆の事件 24章10-23節

神の名を呪った事件の顛末が記されている。

j 安息の年とヨベルの年 25章-26章2節

安息の年とヨベルの年の規定が民に休息を与える時として記されている。

k 祝福と呪い 26章3-46節

結びとして祝福と呪いを説き、人々が祝福の道を歩むようにと勧めている。

2 命は血の中に

テキストに入る。神聖法集の初めに血に関する規定が置かれている。当時の人々は最も神聖なものの一つとして血を考えていた。血は本来神に属するものであり、人間に触れることのできない世界があると考えられていた。だから、「聖なる者となりなさい」と勧める時に、血に関する規定から始めた。

(1) 血は臨在の幕屋の入り口にある主の祭壇に注ぎ込み 1 - 4 節

血に関する第1の規定は家畜の屠殺に関する。

家畜の屠殺は宿営の外でも内でもよい。しかし、血は臨在の幕屋の入り口にある主の祭壇に注ぎかけなければならない。この規定の背後にあった考えは明らかである。食用のための屠殺は許される。家畜の肉を食べることも許されている。しかし、血は神に属する。だから、屠殺したならば血は神に返さなければならない。

そこで、家畜はどこで屠してもよいが、血は主の祭壇に注ぎかけて神に返さなければならない。

(2) 命は血の中にある 10-13節

次いで述べられているのは「血を食べてはならない」という規定である。

なぜ、血を食べてはならないのか。背景に「命は血の中にある」という古い考えがあった。この命は神が与えて下さった。つまり、血の中に命を宿すことによって、神は人間に命を与えて下さった。だから、血は神に属する。

この考えに基づいた興味深い展開が11節にある。

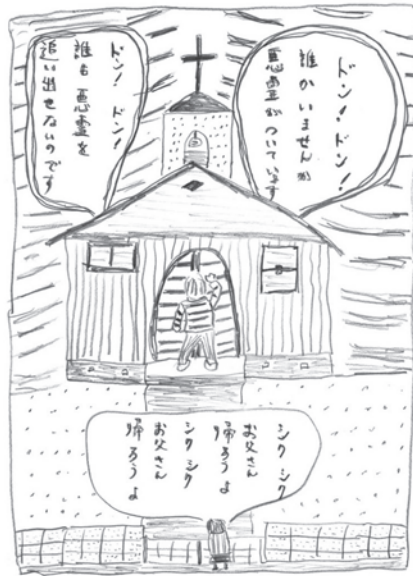
生き物の命は血の中にあるからである。わたしが血をあなたたちに与えたのは、祭壇の上であなたたちの命の贖いの儀式をするためである。血はその中の命によって贖いをするのである。

命の宿った血がなぜ人間に託されたのか。血は人間の罪を贖う力があるからである。このような贖いの考えがキリストの十字架の死の解釈の背景にある。

さらに2点述べておく。1点は血を地面に「注ぎ出し」(13節)と言っていることである。祭壇の前ではなく、地面である。血の注ぎに関して違った記述である。2点目はイスラエルの人々と寄留の他国人が血に関する戒めでは同様に扱われていることである。他国人にも血を食べることを禁じ、血の贖いに加えている。

(3) 血を食べてはならない 14-16節

「血を食べてはならない」という規定が繰り返されている。このような繰り返しは「すべて生き物の命は、その血だからである」ことを確認したうえで、行われている。



救いを求める人

3 あなた方も聖なる者であれ

神聖法集とその第1の規定から学んだことをまとめておきたい。

(1) あなた方も聖なる者となりなさい

一貫していたのは「聖なる者となりなさい」という勧めである。本来、聖とは神に属する特質であって、聖なる神が与えて下さるところに人間の聖はある。だから、神が聖であられるように、「あなたがたも聖なる者となりなさい」と勧められている。

したがって、人間が獲得する聖は生まれながらの特質によるのではない。人の知恵や力や努力によるのでもない。むしろ、人間のうちに聖という要素はありえない。そんなわたしたちに神が聖を与えて下さることにより、わたしたちも聖を生きる者とされている。

(2) 神への畏敬

しかし、どうすれば神が与えて下さる聖を保つことが出来るのか。

神への怖れを持つことである。神の聖に預かる真実は実に不思議な事実である。考えも及ばない事実である。この感謝にたえない真実を与えて下さった神に対してまず畏敬の念を持つことである。

ある年配の女性キリスト者が自らの信仰生活を振り返って繰り返し言っておられた。

神さまは侮られるような方ではない。聖書の神は人間に侮られ、人間の思いで動かされるような方ではない。むしろ、人間こそが神を怖れ、神の前に身を低くして聞く。そういう態度こそ大切なのです。

本当にそうだと思う。神の聖に預かるためにまず必要なことは神への怖れを持つことに違いない。

(3) 贖いの血

「命は血の中にある」というのはずいぶん古い時代の考えに違いない。動物も人間も血を流すと命を失った。そこで古代人は命は血の中に宿っていると考えた。

これは一つの考えである。この考えで重要なのは「命は血の中に宿っている」と考えた人たちが血への怖れを持ったことである。この怖れは神に対する謙虚な在り方を生み出した。だから、ここから新たな展開が生まれた。「命の血こそわたしたちの罪を贖う力がある」という考えである。

「命は血の中にある」というのは古い考えであって、それを無批判に受け入れて生活の規範とする必要はない。けれども、この考えから展開して生まれた罪の贖いとそれに関する儀式には現代人にも通じる真理契機がある。

(4) キリストの血（一コリント11章25節）

そこで、コリントの信徒への第一の手紙11章25節を見ておきたい。

また、食事の後で、盃も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。

イエスは十字架に架かる前に「わたしの血によって立てられる新しい契約」と語っておられる。語られている「血による契約」という真実の前提にレビ記17章の「血はその中の命によって贖いをする」(17章11節)という考えがある。

レビ記にこのような考えがあって、キリストの十字架の真実は成立した。聖書によると、罪の贖いは正しい教えとか優れた説教などによるのではない。そうではなく、そのために傷つき血を流した人がいて、そうして人間は罪赦され贖われる。

キリストの血がそれなのである。キリストが血を流して下さった事実によって、わたしたちは罪を贖われ癒され救われる。キリストの血にはキリストの命が込められているからである。

4 覚えましょう

(11) 血はその中の命によって贖いをする。 レビ記17章

神聖法集の最初の規定は血に関するものであった。血は聖であり、神に属すると考えられていたためである。しかも、命は血の中にあるために血はわたしたちの罪を贖う力があると信じられていた。この血に関する考えと儀式がキリストの十字架への道備えをした。